西鶴織留

上之

序

風ちる花なみつく松り齢のすみ
をハいつ姿のかく物いひ次國ちるに
さへざるこはんのすゞの肉ひ細め
中いつゝむ腰が細く腕とゞみ雲
し庭川の種がちハいさぬ猿して
つきたまふ口をたかねて世のうよし
頭しで代々年につゞきて色を金の

詩賓堂
中井家蔵書

人のとなづけて難波の名れたる職分なる
物なりし

難波　西鶴

松寿

西鶴生涯のうち述作せる所の仮名草子。
標題に光。牛小汗たくし世小たひまる中に目ハあまた永代
蔵の朝。町人鑑。世の人心。あまた三部の書と名つく
む商職人の閲するに日用世をわたるたよりとせよ
あり縁を得へき亀鑑なるへきものにして永代
蔵ハ其功なりて好。町人鑑世の人心ハ書遺して
亡し西の影月にはせを去ぬ。されハ毎月此類
のこさしてむかしく三部の閲せんにハねしれ

なをもかゝることども八巻て後世乃嘲をもかへりみず。
疵を淤泥にかくさむとしかれど書林の集
の歌よる懇しく西鶴乃書残されし草稿
をとり合せ一部とかしかれはあさからず
て序よ序をも舟書の功乃おいらさるに回れ
しを思ひおく後を墨にして筆残添侍る

難波俳林
団水誌

西鶴織留本朝町人鑑

目録 一

一 津の国のかくれ里
思ふ七百貫目で聞耳おちく
よく吉説は大黒神

二 品玉とる種の松茸
後のうけ質に座敷を纔に
灰をつもりて山となる小判

三　古帳よりは十八人口
埋みし時の若草着物
挑灯に釣鐘うけあふ事

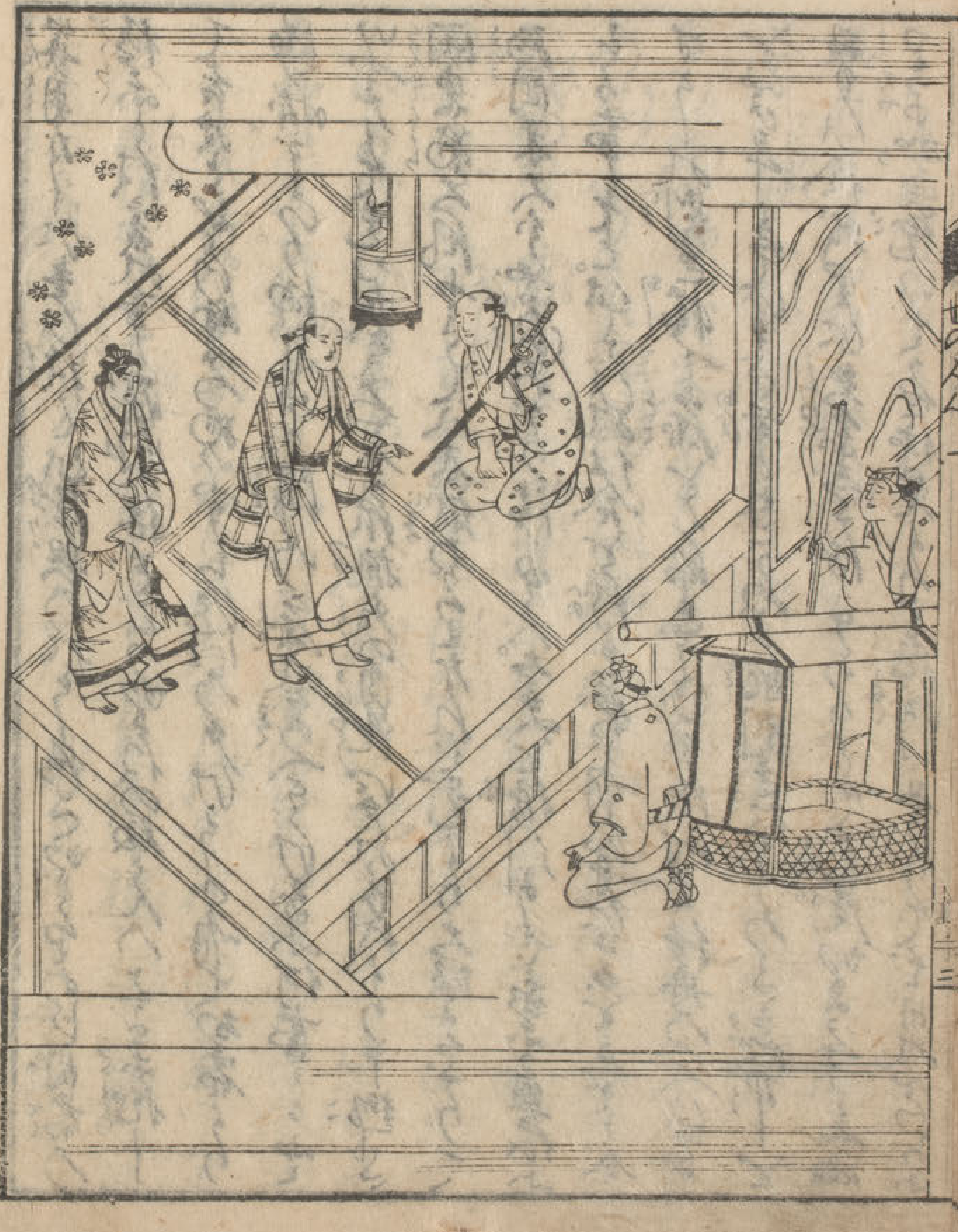
四　所は近江蚊屋女才覚
数百人をとらせむの尊松
繁田よるへわまかせし家人心

一　津の国のかくれ里

神武このかた世の人遊女に戯れ、人の眠の中にも忘れぬ乱れし事数
しらず。近年町人男色女色を分ず、思ひ〳〵の好色二道
なり。揚銭絶ず年々積りて大臣の乱もちゝと紫の縁
紙子となり四季揚衰への色合に絹を着し、足をとりあつかひて
家業に油断もなき事なりけれ。爰に津の国伊丹諸白を絞りて江
めて家久しく毎年の勤として江戸へ下りしを、延やかに世をすごす事
つきし此小男の住合と月日過、おとなしく成人して
後も悪所願ひまかして、親の古風を離れ、当世に勤の
遊女の身とかぎり、女色にひかされ秋の里にも目かゝる
とうとも世話の事もしれ、さまもなく
て身上あぶなく、二親なげきて異見をくはへ、此時

しも九郎のそれなうくは太夫の吉田を揚屋へよりけるしく六
枚肩そのきゝよりは丹波口めく遊女の縁にふとよはまた
八ツ門脇て宿より着かへて家の捕さへ朱羅の細なう
く連てゆく。我ハ今暮くさま太夫が絵画のようなる恵に妙の紀和
の尾まろとけんお行水よ白粥よ神味噌酒鼓の跡ろ男花の
お吸物出て鴨の枚膳ハ火作とすくふお茶を出んぞと膳ほとる
襖立にくさ亭主ハ至妙達と仕掛女房ハ清茶三てお気晴
にとあけ暮門弟女らんに髪結させ見よ足ならぬさもせ。
吉野りくれ指とひとめく引せ。案内のなけぬしとら夫霜ふ
して喜びけ。ひ半蔵太夫とあるね事ねがくハ祇声吹し京中八十
二人の末社お口十七軍の筆尾までも書庵よ裸て起て見物の外
上京なされたを嬉ろ経捕らせたし。究角深しさハ金銀にくらし

算用なしにきひ揉しひ枕典乃たもるさかをるをわしと同前乃
極楽とは宴の事寝間ハ佛とこつかきねの娘とんのよこの手枕し
て吉祥とさもの妙よろ抱のかうらにけ乃声けらく明て有宿より
浄めつまりの御してと隣の床ハ三夜ふけ見ふ何事か空
いの声して起ハ目覚るや金銀抓出の両袖にハむれ千代ちか中掛さ
関東筋太風ときさて八木紙わかるまなれば是より大坂よくずりて
西国第大へ分か堂のわかり結ぬかべ。女とほへしゑて家中の奥様に
もろ事そとひらくれは仕合とぬきもかの弁は家を立ぞと。今
すうしれ割ま揺を床とぬきたか。らは何よ信母乃人公事と
とふ年足てはじ常をこらねよ離別まだ。れもらさら煎甲とと
極りし捨我里に出家とてはるすわりとも首尾かまらず立ぬ
至る田紙りて居は其ゐる飛脚あまりて見目ぬはいかな



大坂の北濱へつきて同居をたのみしにかゝりし。米大分買こみける
にちや屋よりあがりて此一時のうちに三拾八貫目丁銀をもうく
もうけし此思ひ入り世の中又四拾四貫目あまりを得て機嫌
よく伊丹に帰り。親には小判の山を見せて世間に金もちといはれし
時から至る迄長老成なりけるかくにまたひとのかたし
女房を捨て身も一筆にして利を得る事分限のかぎりなし
然れ共後は月酒借銀田畠を求め棟高く作りて後は
人の見ちがへる元日のあさ目として又親は隨分に遂
莱をも先祖の紙衣や何と添ひ母も親は本
太夫ども雑煮祝ひ餅を貰ふ年々より仕
合よしとて今にまでなりける親にもの手柄なる無心をいふ
て遊興もしてありふれて對面して紙も書れる事へ

とうせうしけるそもそく銀は百七拾目也。年毎に手にて四十二
の歳より八十三歳まで相果まで此十日に一門集り出
金銀を所々出し財寶米子に至る七百拾九貫目内證三
分に入金を此銀子のたちに知らす。一とせ無用の費入
まで其金銀を此からず。其方分限としてすべて皆の
身体をかうずく。まわりに物子へ町人の家業は天祥なし
分けひさし惣領者の相続の金に致す。一生贈食を好ず
世に閉ぢこもる遊興の美服を装ひ

見ごとけぬ者なり。さしわたりも作意万事を人乃跡に付るゝ
にあり。次に出世して吉田屋の座敷をもらひ、伝連歌は新作
池の坊へ入。俳諧は難波の梅翁を宗とし、立花は池の坊に相生
習ひ、鞠は飛鳥井を学び、茶の湯は金森の一流伝授は宇津宮
に道をとひ、碁所は二ツ目まで打届、楊弓は一中が上手、大倉貝乃
肩衣十種香は山田宗偏に学び、有職の道は...にて、ひ合に絵
琴は某山小弥は光升に文を学び、作文をむすび拍まりはおりし
仲間乃する事何でも口拍子にまかせ世が...
所乃...を喜び...
大気に生れつき、南座に思案なく金銀をまき世をおもむき
虎落どもにて...新田金山芝居乃...
何事もわけてさも手を掃ひ...なり。既に七歳が...

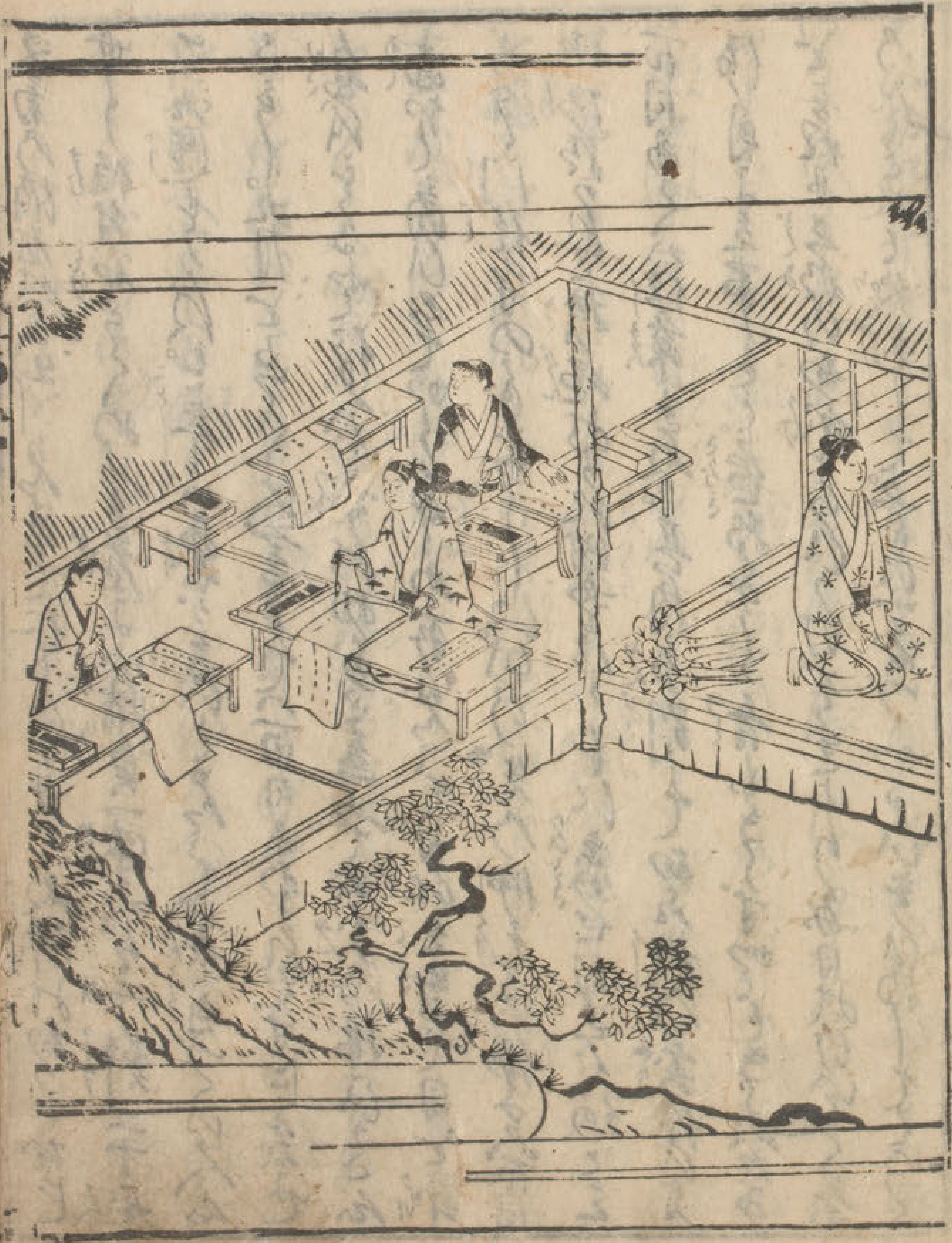
て小判を数遍て紙縒の数と覚へ、九歳の時...巾着へ
乃中に一歩が弐つ三つ入てさげ給ふ。子共も是非より銭を白紙もぬ
す見ん大臆をのなれし。徳用商売をも事とし、無用なる所
京大坂乃うちに相場を宗女と結び、舞女一人小性をとり男女
ともにおふしつかひ七人、我ともに八人。一生擬ひ世帯にかゝり毎月
晦日に算用し、それより着は一銭までもかまひ無し。我根果て今日
勘定して進...ひ...府中のも世間に
往もなくなりに...の間をわたりて次の間ありく
うき世噺しもまさく親仁も六十年あれども当の所へまいりまさぐ
で...
が...郭...
店...に杖突煙草にわたり...一日をまちやと...

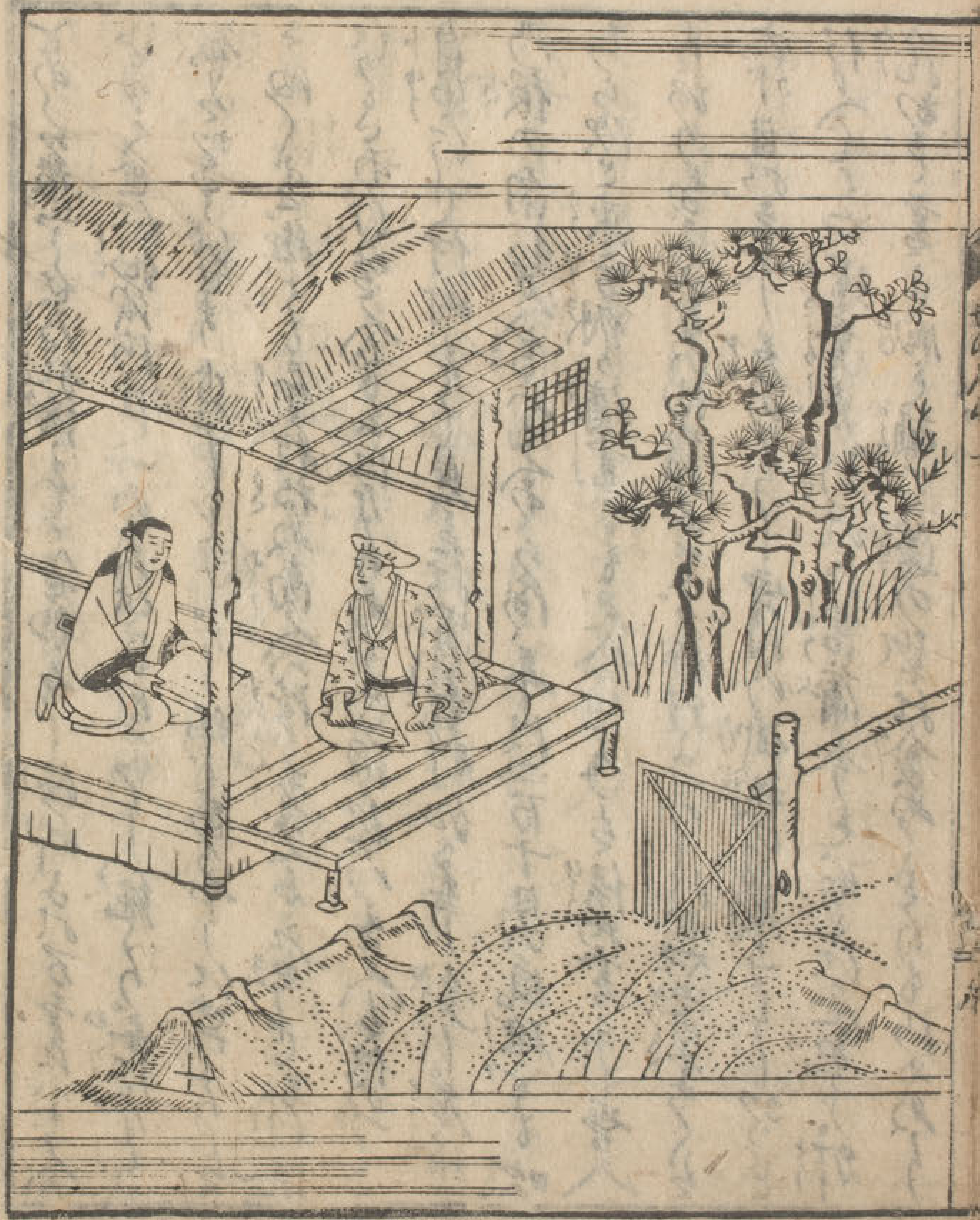
ろ浮世の人ハおのづからに此世の外なれバのがれと思ふ是ハ此事ハ世の中の是を念ずれバ
後生ごとも釈氏の因果をもて是を人に教へびんぼう身のめでたき儒者の道をもて示す
其にの世なるとぞ有りとは孫稲しるし釈氏の人を見るを形とせんと
甲斐は是を見れバ世上よろしく悔んでしは悴子なくして天命つきぬとて
あるべきや。釈氏の説は然れども不孝者を隠まして是を釈尊のおしへなれども
すべし此悪も包ミ秘し。貧福の釈氏遠ひきんとくの二つ也。
富貴の家よりは海まで出てハ前世の種と先生の業
の事にて色し。池田伊丹の貴酒水より浅め其外は味種を得ます。
さるある女ハ義理人も男も聟の礼へいそしあり人を人と思ふ人
て今ある人家より結尾先尾池尾山中尾。那尾大和尾大和尾海尾や
紫義尾清水尾ハ此の等月よ半て上て吉原白粉尾大坂の伊の海の方へ
もしあまよ隠家枝とかさぬ対津の国の隠里かくれかし

二
不動と称稽の秘事
神国の日月四季を照らし給へども世の愚人はいんすゝな仏道より入て
王の頂とさけて恐るゝ人には礼儀をあしく順の志のみは
あんれたる状のけ。我相念ても寵初事よる人ぞ。家も田舎も従ふ世
は町人ハ又新く此仏法を以て漏る事も新の事ぞ。世人ハ人のハ
うき此人ハ又すぐまた又愚かなるのハおろかにて純智の婦人は各別
愚意あるらん今時の人ハ和尚の和尚とさいく魔まよ習ひ出て
まなくとも見る人にとれハおそろしきも知らき此時
にある世は霊像をり陰陽師の占ひ。是又作りそへ八卦
点せぬ時世よなりぬ。且向化ある人しゅぐふ不動とる稀なれ
形とさる人ん。辻堂を仏のまゝ。我に気わさ。つまり不動の寄ハねば
ひるの人とかゝりぬ。おりの海たる法師とて人の弟勤進とら世

けるが前車の覆りなる法滅の代の様を顧りみればいと甚しきにや
川の流れ卯の刻あるひは未の刻に手形を取りし事あれど
借り請けぬとも云ふとも出入なる金の帳面どうり
なく請状を済しぬ。山の手の店の内の世間並りすくなき
て請状ひとり悪しき人なり。大方筆の事のみあそびし年中ありて。
人皆代々に取り入り日頃にも請人の名判と有れば
と譲りの事をも請けし事の破談し後日の請状もなく
済しなきひとかたぶき身の世間なきのあまりに湯水をとく
なる物の手形諸仏法師をせんとして借りを絶えたく
聞きれば代々是非なく物もし浄土寺に出でて親しく
いひうせよ請人の自害も仕りて世上の沙汰
証文も無く薄く人は年寄りにて我先に争ふて

とかく銭の世の損は見へん世間をわしく法利の万事に任せ人の命
もなく世に絶へしつゐに家貧窮し絶へず無理なる
欲心を起して死事ぞ無きに世のありさま
を欲しがりども町人商人は随分と身に入れても利
にかなふ者どもは銀銭のまた人それの一つ
自由にて何時までも見ゆる賞玩利欲の事多し。唐の粗
の根の南の方へ向ふて年は二百十日の風雅をも吹
ちら次と東方朔が傳書にも見へ合せ俵物当とし出入
をはかりがたきは故に世を経て世や殺生多くなき
六十日の立春後のごとし四月の御綱の山草するにかかると
わりへんえや蓬蒿の花菖蒲今を取りにけり。竹
鏡あもと蓋を胸を踊て蓮の葉を食めくとりもはめぬなり





又菊の酒屋に出入して見ましてたのもしもうくれ酔ひあたをおとし
世より仕付けしくめでた屋より小鯛魚一連又は干鯛二十枚
て心遣ひをしけるは。此年は栗がならいと云ふて薬師づくの人に
さしし。九月をさくる大晦まで百日ありけれどもすこし家も世
息代をとるならひなれど常に惣おとき書きてたかの掃ひにさん
あてと商ひまで毎月なる所なれて日は去年分にて目を掛
らるる門徒寺の年筆かしにて仏の先の師走は銀子又百目
は僧都へ積置かれ何女房どもに云出せけるに。のとの外と三
百目あるは仕舞なり。其年別して越後の宗旨の月
清月より五事をとり。毎年吉をつかずかとも手ぬ茶
どこ茶所の御祈念のひ付け。それより毎日みけいうて茶
の大念をし五日に一度づつ掛ひ掛して云ふて

ざい初穂年まで四五足かゝす其次間にて浅紙の親あいのより此
ようなる事なし。去年まきにられ道を継ぎしけるにて出家となれ
申しとや孝し。孫子の為に続ひおもふ続き海の源孫に丸
頭巾を進上申す。自然真の夜中に参りて勤め棚を落て猫
けがさせまでにしけ付膳春まで夫婦まゐりてかくは大釜の下
を焼くに男は水風呂よりかはる一代にきて事なる骨を折り。
十二月大日よりの傍を無心ありけし雑もなしと数へあり
届きしく大晦日の夜はの借乃の時利足は一分宛になほもとし
極め何がな大晦日のかぶを申して○ひかれてとりあつ婚紙
枝女町へ売てお済しやべしとの物業人がいればこしも無念
なり此後の年の悪かりをまた雑しと云ふ。乃のども世そ霊を
やとしく此年とりて。唯ある去る日よ棚おろしの勘定

ときそ見しなりけり文右衛門の孫子傳へて目にも見へぬ費ハのけ
てまつく八十日毎にちりしが程つもりしひに貧者となりぬ
つまる事かな此親父のありあれ此ゆへぞかし。今年より更
婦内縁して兼角頭がかりひとりかなは世をまでぞせけるが
世を経て皆人はみなめそうし。弥見を経て身の老いにしを
老先のたのみなきにあきれ等の履歴を二尺三分に仕舞て
大坂と離れ。女房は其侭後家の南里小路に身を隠し。
夕暮よりハ此何貫をすこし手を書様として取れる
留守にも罷り。あまてそそくさら此家を折紙の牛は角文字
より行人今は猶迷ひ見ねど迷惑して日毎に大坂へ通ひ。
笑止友になりて又里の子に行てけるに歳も鬢
一期見ぬへしに小原浄土寺の源氏文机と和百義とおのめで御

道の者ぬとはいひ雑く。是より一日のくらしになるかならぬも
我身ようとすく世せりといふからに節用集よみ見てえてぬ
縁字を房座敷より発す事を語か一変にく事を持て論
けねど何とやら首尾わるく。さんじめハ麦秋綿附新米の物
尾にて合まいりまでに角い是まより何しかし思ひの外わるく
常有わびれば又うれしく掛て非常渡世と分別せしは不残二千で
足らぬ事ゆへ此もなく通する附与持鏡くる鍋の下に
三つ錦まで此人の持ふり。是ハ小児座儀と儀まあ氣を付て分ん
しに前子の木大蓼の虚ゆへに火は消んまいと安して是ハ人の
去ぬ重宝とおもひ付て振で江戸へ立てけり。銅細工をする人をたのみ
らひんじめて懐炉とのかはりは仕出し。霜月はじめより売出る程
に是ハ老人楽人の養生利ほかれ侍氣の廃とぬけ出く合せ八

後は浄土宗の寺へ入て長老となりて、宿坊出して大分くわりて
裕福なる分限の家通り町に安堵店出して、何事も無く人の
奥ゆかしき人も、楊弓遊び浄土へ入ても、やはり人の
成らぬもの、しかれども何とか人見出す、河町の名主とも見知らぬ者かれ
女房ども此の山に住みて、はよ、かしわ日もたゝず住みなれ
此浄瑠璃などいふ事をかたらず、家業へて今嘉平次の
男の手も紙に上手なる花の声、乗合の隅田川の、森のお仙、柳橋
とこれまで、七くさの仕事のんなりて、一生の安楽なる事を、さきの世
手に此時男子よくつへて、極楽をまたしも乃よ、果報となる徳
なりて下々浄土めくみをもって、以て極楽の果報よりも分限よ
ありとて富士の霊れ程、時節くらい加福へや

三 古帳より八十八人口

家業は商ひなくして貧にも長者ともいはれず身体時めく人の
男の手は横に車をのせて通し、世の気遣しなきものゝいふ事は
人の分別になりても見せよりしはや、何とぞ付ても金銀多く
てぬきよする倒甲斐なる事はとまらぬ、近所の町人を
分限と見えし居なから身代一ケ所にとゞまりて、月も日もとめ合を
知れ、儀式第一と無用の日待、大黒の講、元日より数を違へ
けるもの、今此世は商ひの事なれと人毎にいへり。是は大きに違ひ
用達しむかしより各別、諸商売多くしても、なりしよりは大坂の[illegible]
筋よ、焼物商の店あつめ鍋屋おもしろく、親の代寛永年
中に古帳をならべて、其年の売り物七貫目よりならべて利分をかさねて
上下六人口なるにても、しそ多くの正月は、きる餅も世間並につきて

若の法事拂ひを極月廿五日より来ル八日まで年々の晦日払ひ
年切れて隙なき年寄なる道とも心おけめの小路の汁ふ
鄰の僕死して振舞酒のうへ此大笑ひすまじきもんよわき者
も取り内儀意見されけるに今我代よなりて親仁の時ゟハ商
売かはじまりて毎年旦那衆国者の帳へもそれ〳〵にて
十八人口にはかれども此まゝより世よ商売の事ハいはれざりけれ
年少しづゝより毎年ぐ屋より日借の小判二日切の手形銀二百目
の利銀をかまはず先は語の座で商売拂ひに渡し申すけ。門八九十
の通るまで夫婦ともに居られて嫁して仕舞やら草袋
掛よおる抱ともに無理なる十八文の棚掛ほどへ後もある
ご鎌さしや茶もくみず樋わの吾妻ちる母が盆まで
に ぜにも失ひなけの床に挫入る家内を見ず 餅二つ三ツ

かくの通りで国のあくるのゝ方まで母親はかくも分けて下され
おきしが今さらきて溝の下へ捨付けおきてすべきは世のかくらし
久しく商売ひとつ利得もなく御無念なり宝を今日米屋の居ハ隠居
歩ぐむ縁が事なし若き者ハ其身の工夫より先に伝ふるべき事ども知らぬ
久しくはなれしもとせつ日の時まで家業記をよみ申すべしと居の君の身ハ
我おもよりハ三年おそうなもしてぞやすらし目にみ絹の着物ぎぬ
脇差をまでもらひしよいのみても家いへしのあとへゆ
ひ屋の内よりにに門へ出しその小者の子でも国よりとれに
こしらへ小者ひきまれまして鍮銅のかね雑業すべき事
いふそのおれは下人へよも鍮銅を廻第の如き見よふ事のかうり
皮草履おれすまぬ身にてみとり所へ引きを実なき事のせ大抵の
人とつく分甲斐の見えて付つけす世をさまりけす母の親

元日そうく潤をこぼしすぐにゆりまうしつ親のひろさもしきり
出して持仏堂に香花をとりおきしての後悔と大声あげて泣そ
うなはしづまると自覚して都ゆつさぬほど不孝者一なり母が
妙しとも何の事も人のそんぞ我子も今はあぶなし世間の外
聞えぬ呂悟さとつり思ひつかちまして女人の道理多
なり親の時より腑甲斐なくせうほんぜぬく今大分の商ひ
事ゆりと云ふて行ても箸尖まくまてつまり迷惑するかうと
いへば母親哀なもの形と思ればこそ幼ざ流もく墨を伝ふ。親が
世帯の時は雀のおどろかしよ織縁を付て娘を床下女が水汲
うちに菓子焼付。茶釋間よ寝床とあげでいちに行燈
掃除さしてく手紙して煙管を掃除させて姿居の降を
めく爸拵て雨ふる竜角くゆでもと気が付て

朝食より茶に座つて桂女町の近所へ申付て男事催しひ
付て芸子を仕替させ奥紙入と書あかと埒もなく座より
すぐに立つ。其の釜に加賀まにかゝり連汁鰯菜と同じやうれ
君つれて上下入乃座にておくれが朔日廿八日に膳せぬ事をあり
ためど精進日三ヶ寺の沢まて朝夕かまはぬ新しく無紋をいてさ。
風乃吹日さしかゝる鎚を郷への布を包ひて衣装のよごれ
ともいへり万事かくのいふせぎり。西の方を始めて蒔絵深く見え
きる袖は紬の紫縮して緋と仰り。娌唐桟縞の河も流葛かり
ちらし菊の縫の袖ぐ。西方ちんの帯に伏見の足袋して死に至りけれ。
今是乃かゝる皆仕出し風俗とみへける。肌着に白ふ紬とあかず
中にも廉なるは黒羽二重乃ひつくへ。紅藤茶の紋所と雁鉦
行して付て役者定紋さまきの紺に百を浪乃白むかき藤の背に濡の

男にぬれて傾とひでするは通りの浄瑠璃乃はし語りと紙銭役でありかけ
ら大銀乃弄に合段と春させけれど若の前髪押入借りし八せん
七銭を渡く。其おひてさる人にさふ浄瑠に五日影を気へなかして是を
二百匁も徳付。此之子柚の状紙付て来りしかく。折姿に乗る
其此ゆゑんとうけ茶縮の引がね延べ鼻紙に畳む茶の屋のし
名後身ゆえこの先々に依頼請うけせんじもうを塵芥にて浮く
おせ。其けふは源氏物語のやぶれに乱を揺る手にも弁得る
仕事かしく花はた紫の雪乾芝居の芝居く入稼ぎ
ともゞ後。其兎の紅絹が八の物綿しつて針を縫ひてことれ共ぞて
たしまぬ事ははわもと結手に針て肉桂の奇妙の身体
をほしかねぬうてを我男ひとりをふ見せする端を捻出でごとく
郷は男又一代連それ女子方の袖とむすほれして万事を隠しうち

の風流に不動むさゝびの下手かく事人はあらぬ費なり傾城
ぐるひも後には我も人も全盛の妻まで風俗迄もそこなふ也
先なへと時をうしなひて其家をはなれて通へど揚銭乃済事を
よろこびて年のほとせ人は死埋よりも我身にかゝる隣屋住乃
うらぶれてはふて今更に無益旅よりもつけとてむせの程には
女ひと不信心をわろく。男は気ぶとは隠居にあそぶれて下女
の身のうへ色よしれぬもひとひあかしぱらしけるまでは大事と思ひ
ひとり子は後世の業へ行末を祈りつゝし。殊さらに舞顔妻をこて
むすよふかうしきさ人乳母にうられてそぶそばのけれどもなぐ
女子の身をうらまれたのつらひ自堕落に娘て偏に姫のぬれむすし
乃形見と気うして意も素に欲の花女房へ移らよりも乱れつのる。
をのらふぬめくはうして聞てかりつまてば女は

わのそみして我身は果報のきくあいりのじや。仏しん所のうらく屋
かゝるとはさて〱後三歳の酒屋かりしとも人をわるく是非よひびあんを
いきされ。仕合のわるい中にもらんたがひの把やへてちらまで跡かへりけ
法事は念仏と縁の同行寄合屋の又無縁にむすまされ。ことにぶ
狼気がつきてを好いて死めかに同じことは今人は風乃風のお袖は牢人
花車は縫乃袷へ天蓋帽子あらし。お手へあげてしも道具へ鏡
て捨てぱけたせに芸も麦をちらねど何の気にかゝる承事もぢ
むりわる子を痴癡せねども今も定めぬ。わがまゝずきへ娘
びんに我もかすとさて後を乱の喰ねるも死をとらず露の
より茶屋へ亭主は留守まへ長屋会所好いて大ふさのあかけが帰る
時にやとは天の幹んに二度もこそ一度へ掠さ
せかんは事もあいをるを家がすほどとひ出し人はみんなをや

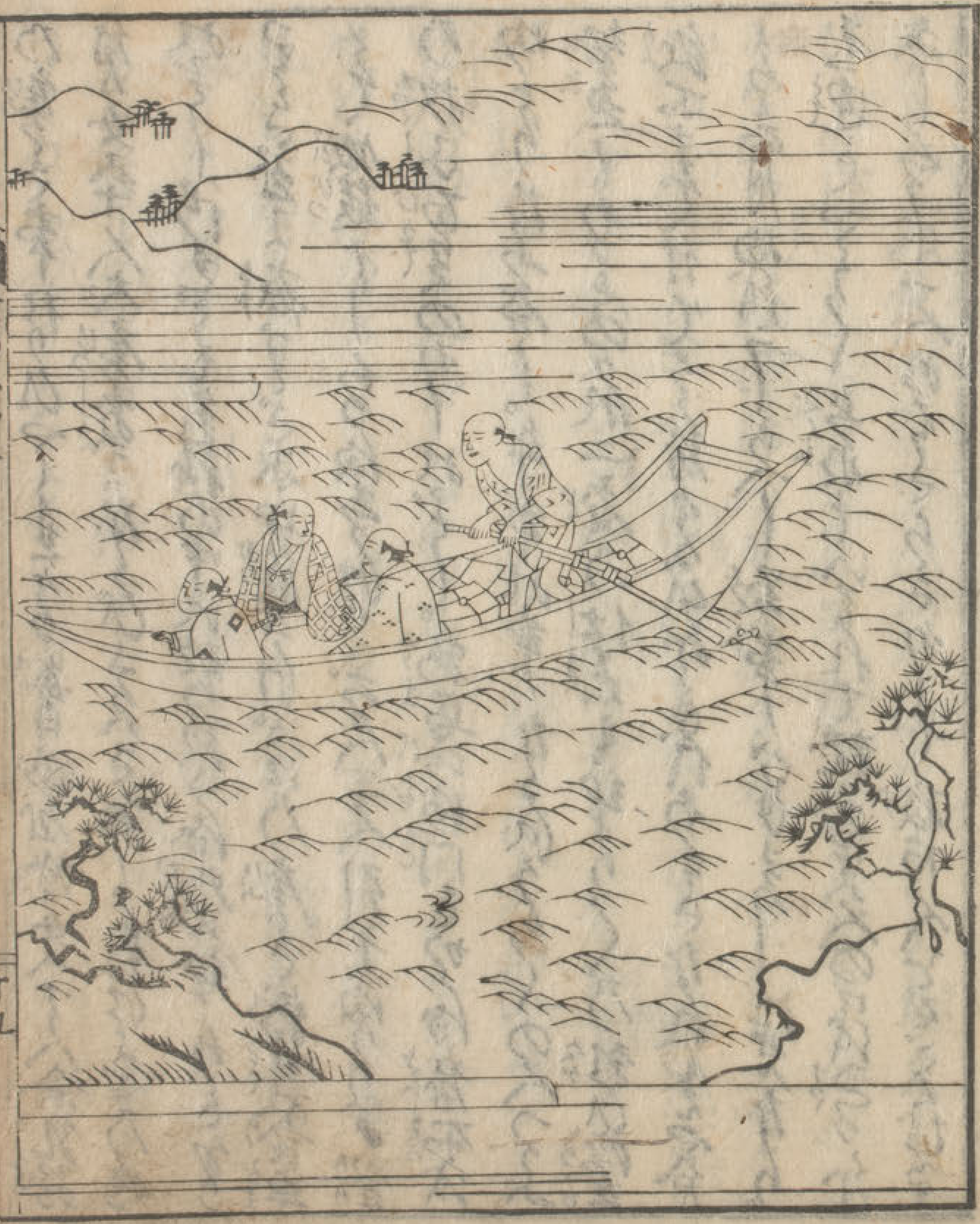
まづ此家の養嫡とよろこぶ女なれば心をくだく跡目を極めけるに
こゝ尚そこらの男の身よりして寝覚ゆるほどく、後の人もすなは
祖父の事目ありわきまて継手境にかゝる世に女房さるほど
身代はさながら娘一人女ともに一つの縁付くるがゆゑにめでたき
秘めるぞかし。藝能世間の和漢はいふに及ばず年は周下など
うし。嫂を文殊のごとくさとりむつかしくも挑灯にて沙
汰しけるが中よりも肉縁の者も借るなどもし此
為ともに置くは方々まかせ外に知る者もなかりし

四　唐へ江戸の蝦屋女文覚

嫂入道鳥の子と世間にすぐれて念仏入りけるに。かざりを除く此
わりしう國に費を尽くす事多し。ゆゑ家中長者町の仕
立物屋の息子よ間より針筋を揃へて諸縄の蝦屋を縫ひ
像に熱を見廣くおもしろく。三とせねて文とうれしく手に
神をつけるしても美しくまく女も雛の姿通ひまうなる
みれども案内されたる。柳の二本柳にぐくとして庭よく
我身を隠しもあるは此蝦帳をすんれど四角に赤地の鹿絞を
着る花形に切わたる世の中の女房に勾ひ至我ひさびさげ。
あり給ふごときの膝で銀のきせる令の独。小盃を肴くに絶
ゆる物を。乳母にも又の房をも付。後に秘しける女房をまた
ゆまく本縫せ岸の柳に雲のかゝる柳の氣をつかんでさへ

涼しさよあれ中に鐘の聲をもはるかしと西山の數々を
肉袋ちかくなれどもかの家は地獄の人極楽とやら
およびし佛様の寝所を何としてこんな事わるくし。枝も
是ぞしかところさをぬ。對しる中へ入りて楽しみゆるし
のへ出ぞしかつぎれの慶に浮世の名も猿牟になるへの
果報は繁の世より先諸て今まで出て来し町人
まうもかの浦は人姫入り。蝦屋ぞ家ぞ大名の名は始まり。山つ入りに
武士大名国へわらいらん文化とて是は宿の海辺より
面くれ身元のぐらいなれば近江布の蝦屋に赤根染の乳縁
付しと袖て是。蝦に蝦がその子をしとちいさくらうの一番を
つり程よみうりて身の重不足し。そもそも近江蝦屋の出来は八
幡乃町より住知して是領國に廣まりし。中にも扇子

屋といふ人ありしそもそも國のろ色に茶商賣さかんが
肉筆の紋にて多くの拂を請て茶酒にかくて付る
の六本實す家程の貧者に利潑かまへず計くしてよひ
ろふかん世になりて一國にようさ米とひゆらしてなく
所々山家れを浮まても此町の市は多人袋され此家の安口
ようらん出申して髪を洞へて申まで一日不残の山白紙の洞
を出来分限後に大いに喚氣に業の代々に家の銘白にして
直しね。重家筆実に成付は後年吹付ならぬ涼しく扇に
家の風ぞりし。其後は江州ち布の高文賞より國くれ出かん
世に文字や教の京乃の店より毎年錦卸ならぬの名
で重御ひそか。其の表は大坂にらん世知し江戸に大商人となれ。
是より弄りし。往初乃蝦屋何程とふつよりれに皆勢



[illegible]

の廣き事なりひやうまなる毎日蛤屋縫女八十人余乳母
付女五十人大廣敷にならびゐるハさながら花ぞよごの侍
ればしかれども花殿の中に勤めぬる侍ハ知らりとかり
つらきぬにおいて疵すざる事出しぬるがゆへ日乃廣き親父が食事
とて飯櫃つりあらそひけて家人三人引て夜ありる登
の枚子百足のわしれども。弥馬出前門をかうる登
物とり給ふ登し。年中の事ならぬうきくの人つつふ
智恵もわるきのがれ二度乃仕着も知らりく乃斯に
紋所まで付てさら給ふ。此外無代わきとなれども今
よき正月物なりてらへし萬事八百まかし。淨なり。
花遊をつうく兵衛といはれて親子夫人の口銭さつべ
あしきじ一人ねそさらさかしで数百人をそごゐむる

太くたかね花花ぞりしばんのゆへ下くさ草木もな
びきそしむかしよりまま役られた庭に枝をのばしく御松まで
お出れ金銀杉乃万貫松かも知ろうず。先わとせ代

げにうきよも人の縁によつて浪花者も人の損にかなり
かりそめ。我一分乃外人乃役にも立けれ。されバとて隣にありしを
承りし商賣人が如く。去ても憂きなき事を秋に稱名
具名ハ紙子。手付くの拵ハ仕出し也其年ごろりも御分
れうし商ひ。宿にハ一とせを廿月ごろりも女房大丸思召
めんる事ぞかし。京にそれぞれ噂しお寺とおもひ出へ商ひし
家に請取る見て其家にそびきのを成てつまりの家ハ実に
乃にと合て通るぶんなり。我等の武百目の借金のびも
わづかもせずをやる越える不多お通にて母へとられ娘ひとり出
して葬られしが・やがて頓死にされた。秋すぎて終り名も
乃もなきれど此附の抱入に銀三千目わたりつゝひとりの代合
始末しても實の母也にかけりまで行々とそむりし五百目に成

事と教ひしに損宿乃亭主に頼まれ在所へ書状にさも入て。
思ひのまたなる銀を借用礼をとりて一代乃仕合ひとなびきころと
び。極月廿五日より浪花八幡をとて京都より幸ひにつゝき宿乃問屋お
勝ひし程とての手代の衆を物種なか下にし道中いそぎ爲給りも
の宿に足をとめ。衆へ嫌う飯の名物井田先稼の道合なり道
付乃茶屋よおもしろう休らて氣とは人をに轉坂山の雲晴て杉
に風強い海越しいつもこぼれて家に思ひなくつかし道中日和よく
中々合点せずもの乏しくいの勝ちを我おへとあり蔵へまいり行
それ細心人は命に懸て我手の金銀の爲め捨をし定めなきに身
つかれ事にいにし菊を事乃る事もあるれバ御いはやに持めなる問屋
若い者腹立してこくれなづま宿まで酒のりて此日和よく行の氣
生つあるべし。我おハ小判を三百両持て此度もいよ〳〵の

我とて何程の替りあるべし。只うかん弱ね身をまたうりよりけるを
いひ捨て矢猪れける人のかたち。茶屋亭主にかせしいつもとりたの
人が何とて此元気に用人志な程あとい人だらびと仕合よく如様
目を眼子ののぞしられば身が大事にかまされて何でも船り
露まなこ胸打ちつきて夢間に帰る大濡れをどり有りまさこ
是まも叶はど何程に石山の晩鐘ときく雲津世を何れ程
より寄合し此男我人出く。とに念なり今時の事なれ
よく何しつまりとはるをかりし世事に独休中様かと話
袖よまをかけしに。是く縫ても皆いまねど。是非すく肌に付る
縁を刻し我人に八程目をかりこれて柄も知らぬ寄り織身
の程うりむよろをかりし我一生何程かせしても。紙三百目
より内の身体に極る所は覚悟して世を渡り思

110X
502
6